

## PROGRAM

人の望みの喜びよ  
ソナタ  
きらきら星変奏曲  
ソナタ

バ ッ ハ  
スカルラッティ  
モーツァルト  
シ ョ バ ン

序奏とロンド・カプリチオ  
チゴイネルワイゼン  
ヴァイオリンとピアノの為のソナタ

サン・サーンス  
サラサーテ  
ドゥビッシー

インタビュアー 相佐 明一(浜松市教育長)

# 四季のコンサート 春

1984年5月1日(火) PM 6:30

浜松市民会館

主催：浜松音楽友の会

後援：浜松市教育委員会

●秋のコンサートは、東教子ソナタ・ソラノリ・サイタルに変更させていただきます。10月15日(月) PM 7:00

3才の頃から父にバイオリンの手ほどきを受け、11才から桐朋学園教授としてクララ・スから招かれたジヤコ・ス・ハル女史および斎藤秀雄氏に師事。1960年の第22回NHK毎日音楽コンクールで第2位、62年に第2回チャイコフスキコンクールで第3位、翌63年にフランス政府給費留学生としてパリに留学。64年のパガニーニ国際音楽コンクール第2位、65年のロビン・ティボー国際音楽コンクール第2位入賞、接フランス、イタリア各地でリサイタルを催し好評を博す。67年にはスイスに渡り、故ヨゼフ・ツェルナクに師事し、さらにその芸術に磨きをかける。12月、イタリア・トリノで開催された第1回国際コンクールで第1位獲得。その後世界各地で演奏会、国内での演奏会、主要オーケストラとの協演で絶讃される。

久保陽子

ソラノリ

中 孝

6才よりピアノを始め、東貞一、井口愛子、井口基成諸氏に師事。桐朋学園高校音楽科を経て、同大学音楽学部に進む。1961年音楽コンクール第1位特賞並びに安宅賞を受賞。翌年第1回パヴェ・クライトン国際ピアノコンクールに日本代表として参加し入賞。1963年-65年ソラノリ給費留学生としてジュネーブ音楽院に留学、クロイツキー教授に師事。67年より渡仏し、68年ベルサイユで開かれた第1回ソラノリ国際コンクール第1位金賞。69年ロビン・ティボー国際音楽コンクール第4位入賞、各方面から激賞された。69年より本格的な演奏活動に入り、その後小沢征爾=新日本フィル、秋山和慶=新日本フィル、マタチチ=N響などを始めとする我国の各オーケストラとしばしば共演。海外への演奏旅行もしばしば行い、ソロ及びバイオリン・ピアノの二重奏により、ソ連、ヨーロッパ各地を中心に歴訪。現在、我国の最も充実したピアノ・ソロのひとりとして、リサイタル、オーケストラとの共演、室内楽での多方面にわたる活躍、高い評価を得ている。



久保陽子のタベ  
中 孝

## 「主よ 人の望みの喜びよ」

Bach

あまりにも有名なコラール「主よ、人の望みの喜びよ」をマイラ・ヘスがピアノ編曲したものである。原曲は教会カンタータ第147番「口と心と行ないと生命を持て」"Herz und Mund und Tat und Leben"の第6曲、第10曲（終曲）に位置する合唱コラールである。バッハの作品は、主として器楽曲と宗教的声楽曲に二分されるが、この原曲は後者に属し、バッハが作曲した555曲もの教会カンタータの中の有名な1曲である。

## ソ ナ タ L. 23

Scarlatti

ドメニコ・スカッラッティは1685年バッハ・ヘンデルと同年に、オペラの作曲家として名を残したアレッシンドロ・スカッラッティの息子としてナポリに生まれた。彼はすぐれたチェンバロ奏者であったため多数のチェンバロ音楽を残しているが、その中でソナタは555曲数えられている。これらのソナタは、実は「Esercizi」エセルシツィと題されているように練習曲という意であり、古典派以降のソナタとは異なる。構造は単純で2つの対照的な部分を反復する単一楽章からできているが奏法の上からも前の時代の作曲家にはなかったような新しい感覚がうかがえる。現代でも非常に新鮮で

おもしろく聞け、独特のスタイルを持っていると言えるだろう。このソナタホ長調L. 23は「行列」とも呼ばれていて、多くの人々に親しまれている愛らしい小品である。

## 「きらきら星」変奏曲

Mozart

童謡「サラキラ星」を主題に、12の変奏を伴った変奏曲。単純な厳格変奏。主題の原曲は「おかあさま、きいてちょうだい」というフランスのシャンソンでそれがそのまま題名になっている。全体を通して技法上ではやさしいが、どのような音色、響きを作り出すかということが問題になる。

## ピアノソナタ第2番変ロ短調 op. 35

3楽章の「葬送行進曲」だけがソナタから切り離されて演奏されたりするため、ポピュラーになってしまったが、全楽章のソナタとしての楽曲構造上からも大変異例で興味深い作品である。列挙してみると、1つは古典派のソナタの楽章配置と割り当てが異なること、もう1つはそれぞれの楽章が独自のそれとかなり色濃い性格を持つことが挙げられる。その特色は主に2.3.4楽章に顕著であり、本来なら2楽章に相当すると思える緩徐楽章を3楽章に配置し、1～2楽章を一続きと思わせることや4楽章の主題性のなさ、竜巻のように過ぎ去ることからも合わせ考えると、単に先に単独で作曲された「葬送」を取り入れただけではない練熟した考えをうかがい知る。独創性が最も効果的に表われた作品である。

## 序奏とロンド・カブリチオ

Saint-Saëns

次の「チゴインネルワイゼン」と同じく、現在最もポピュラーな曲の一つ。これは19世紀後半から20世紀初期まで、後期ロマン派時代のフランスに生きた音楽家ジャール・カミーユ・サンニサーンスの35才の時の作曲によるもの。「チゴインネルワイゼン」の作曲者であるサラサーテに捧げられ初演も同

人によって行なわれた。原曲は2管編成のオーケストラ伴奏であるが、現在ではピアノ伴奏によるものの方が聞く機会が多い。序奏と自由なロンド形式で書かれており、陽気であったり、メランコリックであったり、場面場面が変化に富んでおり旋律は至って覚えやすい。しかし後半に入ってからパッセージはヴィルトオーソの技巧を要する。

## チゴインネル・ワイゼン

Sarasate

作曲者サラサーテは、スペイン生れの偉大なバイオリンニストであった。そのため同時代の19世紀に生きた作曲家たちは（前述のサンニサーンスもそうであったが）彼に弾いてもらうことを想定して数多くの曲を書いた。この曲は、サラサーテ自ら演奏することを目的として作曲されたもので全体は3つの部分からできており、特に第3部のヴァイオリンパートは大変むずかしい。

## ヴァイオリンとピアノのためのソナタ

Debussy

クロード＝アシル・ドビュッシーは、1862年8月22日フランスで生まれる。1875年後に生まれたラベルと共に、印象派の音楽家とされているが現代音楽の創始者といっても過言ではない。

彼らは印象派の美術家が唱えた「物体には固有の色はない」というテーゼを音楽で実行し、光によって微妙に変化して見える色を音で表わそうとした。そのため感覚と個性を重んじ、幾多の制約から解放されることを主張した。創作面の上では、機能と和声の崩壊から新しい和声法を考案し、既成概念の否定から形式主義を批難した。

この「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」は、ドビュッシー最後の作品である。従って最も完成された印象主義の作風で書かれており、表現手段は意識的に簡略化されているが、気まぐれで自由な感覚と深い詩情にたたえられている。

（曲目解説 望月由美子）